

美郷大使 佐々木毅氏 記念講演 「令和時代を生きる」



昭和17年、旧千屋村（美郷町）生まれ。昭和48年に東京大学で法学博士の学位を取得。東京大学法学部教授、同大学院法学政治学研究所長兼法学部長などを経て、平成13年に東京大学総長に就任。平成17年、紫綬褒章を受章。平成27年、文化功労者選出。平成30年、瑞玉大綬章を受章。令和元年、文化勲章を受章。

このたび文化勲章を受章された、美郷大使で元東京大学総長の佐々木毅氏による記念講演が「令和時代を生きる」と題して行われました。（一部抜粋および編集）

令和の時代をどう生きるか。それぞれの立場や社会における役割によつて見方は違つてくると思います。一つ30年前を考えてみると、当時はベルリンの壁が崩れそうになっていてというふうな時でした。30年前は、これで冷戦が終つて世界は一つになり、かつ、「いろいろなところで民主主義が進んでいくだろう」というふうな、ある意味での楽観主義、そういう期待や希望というふうなものがあったと思います。しかし、30年が経つた今は、どちらかというと壁を作ろうという人の方が元気が出てきて、それが選挙の最大の公約になるような、そういう世の中に変つてきました。このような政治の動きというものは、非合理的なもの、偶然的なものではなくて、それなりに先のことを示すサインをその中に含んでいると思います。

壁を作ろうというふうな話は、どちらかというと排除、それから敵視、あるいは恐怖とあるのが後ろにあるような気がしています。

最近の変化というものをどういう言葉で特徴付けるといいか、いわゆる先進国にとつては「恐怖」なのではないか、「恐怖」を感じていることの表れなのではないか、という人が非常に多いです。いろいろな恐怖があるのですが、経済的な侵略というふうなもの、職場が失われるというふうな恐怖もあるでしょうし、文字通り移民の問題が恐怖の対象であるということもあろうかと思えます。いくつかの解釈の仕方がありまして、大きく言うと産業革命以来の歴史というものが、少し変調をきたして終わりつつあるのではないかと、というような見方をする人が、極端ですけども少なからずいます。先進国の民主制において、新しい政党や極右政党が出てきたりして、一体どうなっていくのだろう、というような状態がいろいろなどころで散見されることは事実であります。そして、日本の状態というものはそれらと一緒に動いているわけではないですが、気を付けなければいけないのは、こういった世界の動きというのは一つの流行病みたいなところがあり、非

常に伝染性が強いと言いましようか、無視できない要素としてあるのではないかと、いうことであります。日本はヨーロッパの国々、あるいはアメリカをモデルとしているいろいろなことをやってきたという経緯がありますので、こちらが変調をきたすと、こちらに何ら影響もないというわけにもいかない、というわけでありまして、しよつちゅう総理は変わるし、政党の中は意見が対立してまともでない、このようないろいろな状態が出てきてまして、モデルというものが崩れ始めてきたということは、非常に難しい厄介な状態というものを生み出すということになります。「あるところではこうやっているから、これをやればいい」というような話が通用しなくなり、それによつて困る人は少なからずこの世の中にはたくさんいます。なにかそういうようなモデルと理想というものがどこかに薄れていく、あるいは消えていくというような印象というものが、寂しさというものを感じます。

味でいい伝統だったのですが、今後はどのようにして自分の身を守つたらいいのか、というふうなことについて考える必要があります。自分のできることで、できる範囲、そして何をどこまでやればこうなるか、あるいは何歳になつたらどうなるか、ということについて、65歳になつてから初めて気が付いたということにならないように、若い時も含めて、自分の社会における働きと自分の受け入れ得るサービス、そしてその意味では、逆に言えば自分がどれだけ自由にできるか、自由に振る舞えるか、あるいは自由にチャレンジできるか、といったことについて、もっと自分のリテラシー（読解記述力）を上げていくことが必要な世の中が来ると思っています。

働き方改革などいろいろなことが言われていますが、組織と個人との関係が変わり始めていると思えます。我々の世代は長期雇用、年功序列というものでやってきましたが、それは違う世の中に移りつつあります。個人と組織の関係というのが、戦後の日本とは、特に昭和時代とはだいぶ様変わりを始めるようになってくるのではないかと感じています。それと、もちろんAI（人工知能）などの新しいテクノロジーの導入という問題もあると思えます。その意味で、各個人がどのようにして自分の人生を設計していくかという意味では、若い人を含め、たいへんシビアな勉強をしなければいけない状況になってくるのではないかと思っています。これまで日本国民は、政府や自治体を文字通り信用して身を預けてきた、あるいは会社に自分を全部委ねてきたという面が少なからずあったと思えます。それはある意

お金がすべてだとは全然思いませんが、ある意味で一つの現実を測る尺度として身に付けるということが、必要な時代がますますこれから来るということを、残念ながら覚悟しておかなければならないと思えます。そのことを分かつたうえで、もっと新しいことに挑戦する、活動するということをしなければ、令和の時代は社会が沈滞してしまうことになると思えます。最大の原因はやはり人口減で、秋田県の抱える最大の難問だろうと思えます。美郷町も10年間で10%強の人口減がありました。ただ、美郷町は非常に財政が強く、いろいろな財政比率も秋田県の中で最も健全で、かつ、新しい事ができる市町村のトップクラスに入っているというふうなことであります。まさに美郷町が行っているように、各個人が自分の生き方と自分のもっているリソース（資産）を常にそろばん勘定するような習性というものが、自分の将来展望について、冷静かつ着実に見直しをつけるような、そういったものを強めていっていただく必要があるのではないかと感じています。

秋田魁新報社美郷町駐在

歴代記者によるトークセッション

美郷町が歩んできた15年を、町民の立場として、また、記者の立場としての両方の視点から振り返り、美郷町の魅力や今後の展望について語っていただきました。（一部抜粋および編集）

駐在してみて印象に残っていること

藤田氏：行政の施策として「地販地消（地元で生産されたものを地元で消費する）」というものがありました。赴任前は大型スーパーなどで買い物をしていましたが、六郷に住むようになってからは、一町民として「地販地消」を意識していました。店主さんと話をしながら買い物をしていくことが印象として残っています。

美郷町の自慢できるところ

藤田氏：美郷町は真昼岳との距離感が絶妙で、「遠すぎず近すぎず」という感じでした。毎日見ていると四季の移り変わりが伝わってきますし、この環境は自然が豊富な秋田県であっても、そうそうあるものではないと思っていました。美郷町をアピールするうえで、一つのポイントになると感じています。

美郷町の水について思うこと

大原氏：美郷町の水は飲んでもおいしいですけど、見ても楽しめるものだと思います。住んでいたアパートが六郷にありましたが、歩けばきれいな清水が湧いて

いて、そういった環境が自分にとっては住みよい町だなと感じていました。なので、もっと水に親しめる場があれば良いのかなと思います。例えば、清水の周りでお茶をしたり、コーヒーを飲んだり、そういった機会がもっとあれば水に親しめたのかなと思います。

今後の美郷町に期待したいこと

出雲氏：美郷町に関する記事の中で、最近若い方のチャレンジとして、農家の人たちの話題を新聞でよく見る気がします。この方々は「美郷町を盛り上げよう」「美郷町で頑張ろう」という気持ちをもっていますので、皆さんにも、町を引っ張っていきけるような新しい試みをしていくことを期待したいと思います。



藤田 向氏

統合編集本部運動部部長代理・週刊さきがけスポーツ編集長（駐在期間：平成20年10月1日～平成23年3月28日）



大原 進太郎氏

統合編集本部政治経済部（駐在期間：平成23年3月28日～平成26年4月1日）



出雲 千穂氏

統合編集本部デジタルセンターデジタル部（駐在期間：平成26年4月1日～平成29年5月13日）

美郷町合併15周年記念植樹を行いました

11月2日、美郷町に寄贈された桜（ソメイヨシノ、はるか、三春滝ザクラ）の苗木を美郷町中央公園に植樹しました。いずれも福島県内で育てられたもので、はるかと三春滝ザクラの苗木については、東日本大震災復興支援への感謝として寄贈されました。



2団体によるセッションも行われた、美郷ジャズオーケストラ（ラフェスタMST）と菖蒲太鼓保存会による音楽交流。美郷町民歌も演奏され、会場の皆さんとともに合併15周年を祝いました。

美郷ジャズオーケストラ（ラフェスタMST）・菖蒲太鼓保存会による音楽交流

